# 日常ノ崩壊

ファルコン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日常ノ崩壊

【Ｎコード】
Ｎ５０９３Ｚ

【作者名】
ファルコン

【あらすじ】
これは、日常をメインとした二次創作小説です。何となく書いてみた作品ですが、感想等お寄せいただければ嬉しい限りです。
作中は、グロテスクな表現が多数出てきますがご了承を…ｍ（＿）ｍ
あと、タイトルがおかしいですがご了承を…（汗）

**（前書き）**

考えようによってはかなりグロく、そして日常のキャラ崩れがやや激しいですがご了承ください（汗）

『あんな事さえなければ…いつも通りの日常が過ごせたかも知れないのに……』

これは、とある三人の少女達の、些細な事で発端した事件である。
その日、時定高校の生徒「相生祐子」は普通に学校へ行っていた。
みおも一緒だ。

「…そういえばさ、麻衣ちゃん見かけないね」

「うん、そうだね…」

祐子はどことなく元気が無かった。いつものバカっぷりが無かった。
というのも、ある問題が起きていたからだ。

話は数日前に遡る―。
ある日、祐子達は教室に居た。それはいつもと変わらない『日常』の光景だった。だが、放課後麻衣が靴箱へと向かうと、何やら金色の小さな物が置いてあった。それは…画鋲だった。しかも靴の中に仕込んである。麻衣は最初は軽い悪戯だろうと思いあまり気に留めなかったが…。
だが、麻衣へのイジメは日に日に激しさを増し、そしてやがて祐子が突然麻衣を無視し始めた。

「みおちゃん帰ろう～♪」

「う、うん…ゆっこ、麻衣ちゃんも一緒だよね？」

みおは祐子に問いかけたが祐子は麻衣の事になると話さなくなり、そのまま麻衣の前を通り去っていった。

「どうして…ゆっこは私の事を無視するんだろう…」

麻衣はどことなく寂しい思いをした。そして、それはやがてある思いに変わる。

「もしかしたら、私への悪戯はゆっこの仕業…？」

決定付けるには早いが悪戯は祐子の仕業では無いか、と思うようになった。だがそれでもそうしていないと信じ、気を取り戻そうとした。

だが…それでもイジメは酷くなっていった。そして麻衣は遂に学校に行かなくなってしまったのだ。

「麻衣ちゃん…今日も来てないね」

「う～ん…まあ風邪だよ単なる風邪」

「本当にそう思うの？」

「私はそう思うよ」

みおは何度も聞いたが、それでも同じ答えだけが返ってきた。この時みおは一瞬麻衣と祐子との関係を怪しく思ったが何も口出しはしなかった。

それから一週間程度経って、麻衣は完全に学校に来ないでいた。流石に怪しく思ったみおは祐子を連れず、一人で麻衣の家へと向かった。

「麻衣ちゃん…私、みおだよ。入っても良いかな？」

麻衣はみおだけが居る事を確認すると中に入れた。

「麻衣ちゃん…最近学校に来てないけど、何でかな…？言いにくい事なら良いんだけど、話してくれるかな…？」

「…私、イジメられているんだ…」

麻衣がイジメられている事を知ってみおは驚いていた。

「…誰にイジメられてるの？」

「ゆっこだと思う…この前は靴の中に画鋲が仕込まれていて…そして最後に学校来た日には、机に酷い落書きがあったんだ…しかも字からして、ゆっこ…」

「そうなんだ…明日、ゆっこに聞いてみるよ。もし本当にゆっこがしてるなら、私はもうゆっことは親友を辞めるよ」

みおは麻衣と約束をし、帰っていった。

次の日、みおは強気の姿勢でゆっこに聞いた。

「ゆっこ！ちょっと話があるんだけど！」

「な、何…？みおちゃん…」

「あんた最近…誰かにイジメとかしてないよね？」

イジメという単語を聞いた祐子は首を傾げた。

「イジメ？私が誰に？」

「とぼけないで！昨日麻衣ちゃんから聞いたよ！！」

「…ひょっとして、私が麻衣ちゃんを無視し続けてる事…？あれは、もうすぐ麻衣ちゃんが誕生日だからドッキリにって思って無視してるんだけど…」

「え…？そう…なの？」

みおはしばらく口を開けたままだった。そしてようやくして、祐子に水上家での事を話す。

「…そうなんだ…でも、画鋲と落書きは私はやってないよ。絶対に…」

「本当に…？」

「うん…本当だよ…」

みおは半信半疑になりつつも、祐子の話を信じてみた。そしてその日の夜…。

「麻衣ちゃん…ゆっこは無視はしてるけど、落書きと画鋲は知らないらしいよ…」

『そう…でも、もう大丈夫だから…』

「…そっか。なら、明日からまた学校においでよ」

『うん…ゆっこを楽にさせてあげるから』

麻衣は意味深な言葉を残し電話を切った。その後、麻衣の口元がニヤリとしていた。大きなハサミを持ちながら…。

ーそして現在(いま)…この日は雨の天気だ。

「…麻衣ちゃん、来るって言ったんだよね？」

「うん…そのはずなんだけど…」

みおは何か不吉な予感がした。もしかしたら…そう心配していたが学校まで何とか着く。周りにはまだ誰も居ないが…。

「何だか…まあ良いかな…」

みおは押しかかる不安を自分の気のせいにし、学校まで入っていった。

…実は、麻衣はみお達よりも一足早く学校に来ていた。というのも……「祐　子　を　殺　す」為だ。手には、大　き　な　ハ　サ　ミがしっかりと握られていた。

「ふふ…ゆっこ…今すぐ楽にさせてあげるから…」

麻衣は不自然に笑いを浮かべる。教室の入り口には鋭い刃が付いた足を挟む罠が設置されてある。

時間を経るごとに麻衣の、祐子への殺意は増していく…。そして教室を開く音が…祐子とみおだ。

「麻衣ちゃん、スラマッパギ……」

祐子が教室に足を踏み入れた途端罠は発動し、祐子の足をがっちりと挟む。下手したら切断まで起こりそうだ…。

「…麻衣…ちゃん…？」

「ゆっこ…おはよう。今すぐ、楽にさせてあげるからね…ふふ…」

「なん…で…？うわあっ……！足が……！！」

祐子の悲鳴が早速響き渡る。それを見ていたみおは、止めようとする。

「麻衣ちゃん…もう止めてよ！ゆっこは悪くないんだって！」

「邪魔するならみおちゃんも同じ目に遭わせるからね」

麻衣にそう言われみおはただ立ち尽くす事しか出来なくなってしまった。

そして、何とか自力で罠を解除した祐子は、足から血を流しながらも麻衣に聞く。

「麻衣…ちゃん……何で…私を殺そうと……？」

「…それは…ゆっこが私をイジメるからでしょ？」

「ひょっとして…無視した…こと…？あれは…麻衣ちゃんの誕生日が近いから…ドッキリにって思ったからなんだよ…？」

「そんなの…信じない…！！」

麻衣は強い殺意を込めてナイフを握り祐子に切りかかった。だが祐子は寸前で避けきる。

「ちょっと…待って麻衣ちゃん…！」

祐子はそう呼びかけたが麻衣は反応せず、大きなハサミを手に取り祐子の元へと一瞬で駆け寄る。

「ゆっこ…痛いけど、我慢してね…ふふ…」

そう言って麻衣は……

祐子の右腕を切断した。

「…？！…嘘…右腕が……いやあぁぁぁー！！！」

祐子は大きな悲鳴を上げた。それはもう…女子らしい大きな悲鳴を……。

辺りには、血の海が広がり祐子の右腕は生々しく妙な音を立てて落ちた。

「ま…い…ちゃ…ん…本当に…ゴメン…って…ば……」

祐子は血の海を見たショックで倒れていた。倒れていながらも力を振り絞って麻衣に声をかける。みおも口を押さえながら、麻衣に声をかける。

「麻衣ちゃん…本当にもう止めて！！ゆっこは…ゆっこは麻衣ちゃんの誕生日を祝おうと思ってドッキリを仕掛けただけなんだから！！…うえぇ～…ヤバイ…吐きそうだよ……」

みおは思わず嘔吐してしまう。だがそんなみおの事など気にせずに、麻衣は今度は祐子の左足を切断する。

「うわあっ！！！お願い麻衣ちゃん…止めて…！！！」

祐子の左足はまた、大量の出血をしながら切断された。非常に惨い音を出して…。

「全部、ゆっこが悪いんだよ…私をイジメたりなんかするから…！」

「ちが…う…よ……私…なんか…じゃ…ない……」

祐子は意識が朦朧としていた。もう間もなく死を迎えるだろう…。みおが、麻衣を全力で止めようとするが突き飛ばされ、気を失ってしまう。

「ゆっこ…私はゆっことずっと親友で居たかった…だけど…もう無理みたいだから…今ここで楽にさせてあげる…！」

そう言って麻衣は大きなナイフを取り出し……。

祐子の心臓を勢いよく一刺しした。

「はあ……ゆっこ…？」

祐子はもう息が無かった。祐子の周りには、大きな大きな血の海が広がっていた。

「ゆっこ…本当に死んだんだね…」

麻衣は息を整える。返り血が制服に付着している事など全く気にもなっていないようだ。

…と、麻衣はあるものを見る。手紙だ。

「これ…ゆっこが書いたもの…？とりあえず…読んでみよう…」

麻衣は手紙を手に取り、読んでみた。すると…麻衣の目から涙が…。

「…ゆっこ…ゆっこの言ってる事は…本当だったの…？なら何で私はゆっこを殺したりなんか……！」

手紙の内容は死ぬ前の祐子が言っていた事と同じだった。ついでに、文の最後には「麻衣ちゃん、いつまでも、ずっとずっと親友で居ようね」という文まであった。

「ゆっこは…麻衣ちゃんの誕生日を祝う為に必死だったんだよ…？」

「みおちゃん…私、どうすれば……どうすれば……！」

麻衣は今までで初めて、みお達の前で涙を見せた。そして麻衣にはある考えが浮かぶ。

「…私も死のう…」

「麻衣ちゃん！何考えてるの！？ダメだよ死んだりしたら！！」

「止めないで！…良いの、もう私なんて……ゆっこを殺してしまったから……」

そう言って麻衣は血の付いたナイフで自分の心臓辺りを勢いよく刺した。

しばらくして、血が大量に出て、血の海が更に広がった。そして麻衣は、ゆっこの上に重なるようにして死んだ。

あっという間の出来事だった。些細なことで事件は起きた。それを止められなかったみおは悔しくてしばらく無言で居た。

…しばらくして、みおは警察を呼び事件は調査される。みおは事情聴取にも素直に受け、そしてありのままの事を話した。

ちょっとした行き違いから生み出された残虐な事件…これはテレビなどでも放送され、全国に広まった。

そしてあの残虐な事件の後のみおの行方は、誰も知る事は無かった…。

**（後書き）**

ゆっこ「まさかあんな事無いよね？」

みお「まさかあ～。ねえ？麻衣ちゃん？」

麻衣「無いと思う…私は」

ゆっこ「だよね。私達の日常はそんな簡単に壊れたりなんかしないもん」

あくまでこれは、架空の物語です。従ってゆっこ達は今でも仲良く、それぞれの日常を過ごしている事でしょうね（＾－＾）

日常のイメージが崩れたなら誠に申し訳ありません。そしてグリーなどのＳＮＳサイトなどで麻衣ちゃんのナリをしている全国の方々、麻衣のイメージ崩しをお許しくださいｍ（＿＿）ｍ

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5093z/

---

日常ノ崩壊

2011年12月17日08時46分発行